

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19958

研究課題名(和文) ジル・ドゥルーズと20世紀後半フランスにおける共同体論

研究課題名(英文) Gilles Deleuze and the Theory of Community in Late 20th Century France

研究代表者

黒木 秀房 (KUROKI, Hidefusa)

立教大学・外国語教育研究センター・教育講師

研究者番号：00907511

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀フランスを代表する哲学者ジル・ドゥルーズの哲学とそれ以降のフランス現代思想の相関を、共同体論の観点から再検討することを目的とするものである。身体概念を刷新しながら共生について思考を深めたフーコーやバルトを代表する同時代の思想的潮流のうちにドゥルーズを位置づけなおし、とりわけ70年代のガタリとの共著『アンチ・オイディプス』を読解しながら、ドゥルーズが近代的家族とは異なる「小集団」の形成を探っていたことが明らかにされ、70年代のドゥルーズの議論が80年代以降の共同体論の隆盛にも大きく寄与している可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドゥルーズ、フーコー、バルトら70年代のポスト構造主義と、ナンシーをはじめとする80年代以降のポスト・ポスト構造主義との関係について近年関心が高まるなか、共同体論という観点から両者の間に接続可能な点を探る本研究は、これまでのフランス現代思想研究の刷新に寄与するものである。さらにその中で、ドゥルーズが提示しようとしていた主体性と共同性をめぐる議論が、現代のジェンダー論や家族論にもつながるアクチュアルな視座を拓いていたことが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reexamine the correlation between the philosophy of Gilles Deleuze, a leading French philosopher of the 20th century, and contemporary French thought since then, from the perspective of the theory of community. By re-positioning Deleuze in the context of the contemporary thought currents represented by Foucault and Barthes, who deepened their thinking on symbiosis while renewing the concept of the body, and especially by reading "Anti-Oedipus," written with Guattari in the 1970s, it becomes clear that Deleuze was exploring the formation of "groupuscule" that are different from the modern family. He also showed that Deleuze's discussions in the 1970s may have made a significant contribution to the flourishing of community theory in the 1980s and beyond.

研究分野：フランス現代思想

キーワード：フランス 現代思想 ドゥルーズ フーコー バルト ナンシー 共同体 身体

1. 研究開始当初の背景

20 世紀後半のフランスを代表する哲学者ジル・ドゥルーズに関する従来の研究は、哲学史研究および彼自身の思想的変遷を追うものが中心だった。しかし、抽象度の高い彼の議論を理解し、その意義と必然性を十全に把握するためには、内在的なアプローチのみでは不十分であり、彼の死後 25 年以上が経過し、コーパスが整備され、多くのモノグラフィーが出版されるいまや、歴史的文脈において再検討する段階にさしかかっている。

そこで注目したのが、70 年代にガタリとの共著の形でセンセーショナルな哲学で知られるドゥルーズと、80 年代以降のポスト・ポスト構造主義の哲学者たちとの間の関係である。80 年代以降、フランス現代思想では、ジャン＝リュック・ナンシーらがバタイユ読解を経由しながら、共同体の問題を哲学のみならず、文学、芸術と絡めて論じながら広く展開したことはよく知られている。

ところで、研究代表者はこれまで、80 年代以降の後期ドゥルーズに焦点をあて、存在論と美学を通底する問題連関について継続して研究を積み重ねてきたが、その中でドゥルーズの著作群における「共同体」という語の使用の極端な少なさにもかかわらず、共同体論の決定的な重要性が徐々に明らかになってきた。

しかしながら、ドゥルーズ哲学と政治に関する先行研究は数多くあるが、その対象は 70 年代のガタリとの共著時代のものが大半であり、しかも共同体のテーマについては包括的な議論がなされているとは言いがたく、ドゥルーズとそれ以後の哲学との関係については近年、関心が高まっているものの、まだ検討が始まったばかりだと言える。

しかしながら、80 年代以降のフランス現代思想において盛んに論じられることになる共同体の問題について、ドゥルーズ哲学もまた大きな貢献を果たしているのではないかと。こうした問いの元に、ドゥルーズ哲学における共同体の問題系を探ることにした。

2. 研究の目的

本研究は、現在までに至る共同体論の端緒を 70 年代のポスト構造主義哲学、とりわけフェリックス・ガタリとの共著を含むドゥルーズ哲学に求め、最終的にポスト構造主義哲学がフランスのみならず世界的に受容されるようになった歴史的意義と背景を問い直すことを目的としている。

これまで、ドゥルーズ哲学において共同体のテーマが等閑視されてきた背景には、主に二つの理由が考えられる。第一に、ドゥルーズ自身が従来の哲学と大きく異なるタームを使用するため、共同体にかんする議論が見えにくくなっている点である。とりわけ、共同体論再考の立役者であるナンシーがドイツ哲学を思想的背景にもつものに対し、ドゥルーズはむしろドイツ哲学の用語を避ける傾向があるため、両者の間にかんしてはむしろ断絶が強調されることが多かった。第二に、共同体論再考にあたって「身体 (corps)」概念の刷新が重要であったことは広く知られているが、ドゥルーズにおける身体のテーマに限って言えば、従来の研究においては個性性の議論との関連で論じられることが多く、共同体との関連においてはあまり触れられてこなかった点である。

そこで本研究では、上記の点を踏まえたうえで、最新の哲学研究や共同体に関する議論と絡めて検討しつつ、最終的にドゥルーズ哲学が 80 年代以降の共同体や共生に関連するテーマに関連する重要な発想を展開していたことを跡づけることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、主に一次文献や二次文献の精緻な読解に基づき、かならずしも哲学者本人が明示的に語ることのなかった点についてあぶり出す作業を中心に行われた。その際、内在的アプローチのみでは、現代思想特有の、独自の概念や抽象度の高い議論を十全に理解するのは困難であるため、従来のテキスト読解にくわえ、それを補完すべく、これまで言及されことのなかった未公開の書評などにも目を配り、またドゥルーズの伝記的事実も合わせて検討するなど、実証的アプローチも組み合わせて、より多角的に検討を行った。また、ドゥルーズと同時代の思想的文脈を読み解くために、フーコーやバルト、また 80 年代以降の共同体論の発展を見るために、その代表格であるナンシーを中心に、これらの哲学・思想を読解する作業も同時に進めた。

4. 研究成果

本研究の成果を大きくまとめるならば、ドゥルーズは「共同体 (communauté)」という言葉あまり使わない、というより意識的に避けていたようにさえ思われることがあるが、現代的な視点から改めて捉え直したとき、すでに 70 年代から、とりわけガタリとの共著において、共同体や共生のテーマに関連する重要な視座を提示していたことを、主に「身体 (corps)」に関するドゥルーズ、およびドゥルーズ＝ガタリの特異な発想のうちに見出すことができる点を明らかにした点である。

より具体的には以下の通りである。

(1) これまであまり言及されることのなかった、インタビュー、書評、手紙を読み解きつつ、フーコーやバルトの著作、講義録を読解することで、70年代のドゥルーズ哲学の発展にかんして、ヌーヴォー・フィロゾフと呼ばれる哲学者たちを対蹠点として、フーコーの権力論の影響の下に、フーコー、バルト、ドゥルーズがそれぞれ身体概念を刷新しながら、マルクス主義とは異なる仕方です「共にあること」について考察を深めていたことがわかり、同時代の思想的状況を深掘りすることができた。

(2) 70年代の『アンチ・オイディプス』に見られる家族主義批判の分析をつうじて、ドゥルーズ=ガタリが可塑的な身体のあり方について着目しつつ、近代的家族の人間関係に代表されるような自然状態から社会的自我への移行の場とは異なる「小集団 (groupuscule)」の形成が探られていることが検証された。また、こうした試みが、家族や結婚にかんするアクチュアルな問題を考える際にも有用であることが指摘され、ドゥルーズ=ガタリの内的読解が深まるとともに、その汎用性の高さが示された。

(3) 以上の研究を進める中で、かならずしも直接的に共同体論をテーマにしたものではないが、70年代のドゥルーズ=ガタリの文学論『カフカ』、60年代に執筆され、70年代に増補・改訂が行われた『プルーストとシーニュ』、80年代の『シネマ』、とりわけミュージカル論といった芸術論のうちで、それぞれ外国語、感覚、運動の問題が論じられており、そのいずれもが共同体のテーマにもつながっていることが指摘され、芸術との関連においても共同体論の広がりが示された。

なお、新型コロナウイルスの流行の長期化の影響で、当初予定していた通りにすべて研究が進まなかった。とりわけ、2021年度に予定していたフランス現地での資料調査は、2022年度の本研究期間の終了間際に行わざるを得ず、調査の成果を活かす時間が十分に取れなかった。とはいえ、出版されていない初期ドゥルーズの書評を収集出来たのは成果の一つだと言える。

これらの研究は、20世紀後半の哲学・思想史研究に進展をもたらすものであると考えられ、今後より完全な形で成果を公表していくことにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒木 秀房	4. 巻 10
2. 論文標題 「世界の運動」への夢：ドゥルーズとミュージカル映画	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教映像身体学研究 = Rikkyo review of new humanities	6. 最初と最後の頁 1~20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00022611	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 黒木秀房	4. 巻 3556
2. 論文標題 ダヴィッド・ラブジャード『ちいさな生存の美学』（堀千晶訳、月曜社、2022年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 黒木秀房	4. 巻 11月11日号
2. 論文標題 森田裕之『ドゥルーズ=ガタリ『アンチ・オイディプス』を読む』（作品社、2022年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 黒木秀房	4. 巻 55（3）
2. 論文標題 エゴン・シーレのパッション	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 220-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒木秀房	4. 巻 6
2. 論文標題 『ジル・ドゥルーズの哲学と芸術 - ノヴァ・フィグラ』合評会後記	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 hyphen	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 黒木秀房
2. 発表標題 不朽の生成ーブルーストと「感覚」の論理
3. 学会等名 日仏哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黒木秀房
2. 発表標題 ドゥルーズ = ガタリの家族主義批判
3. 学会等名 欧米言語文化学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 マリ = ジョゼ・モンザン、澤田 直、黒木 秀房	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 146
3. 書名 イメージは殺すことができるか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『ジル・ドゥルーズの哲学と芸術 - ノヴァ・フィグラ』合評会后記
<https://dglaboratory.files.wordpress.com/2022/02/hyphen6-kuroki.pdf>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------